

Symposium for safety promotion in KYOTO

講演集

目次

挨拶

- 1 山田 啓二 京都府知事 1
- 2 栗山 正隆 亀岡市長 2

基調講演

- 1 **What is a Safe Community and How do we get there** 3
Lief Svanstrom スウェーデン王立カロリンスカ医科大学教授
WHOセーフコミュニティ協働センター代表
- 2 **Key issues and challenges on Safe Community in Korea** 11
Nom-Soo Park 韓国アジョ大学医学部外傷予防及び地域安全向上センター 准教授

逐次通訳 白石陽子(株)マチュールライフ研究所)

報告講演

- 1 **社会調査からみたセーフコミュニティ活動の課題** 17
~安心安全と健康をつなぐ社会的結びつき~
中谷友樹 立命館大学文学部人文学科地理学専攻准教授
- 2 **セーフコミュニティ 篠町自治会の活動** 26
井内邦典 亀岡市篠町自治会長

- 質疑応答** 32

挨拶

-1 主催者挨拶 山田 啓二 京都府知事

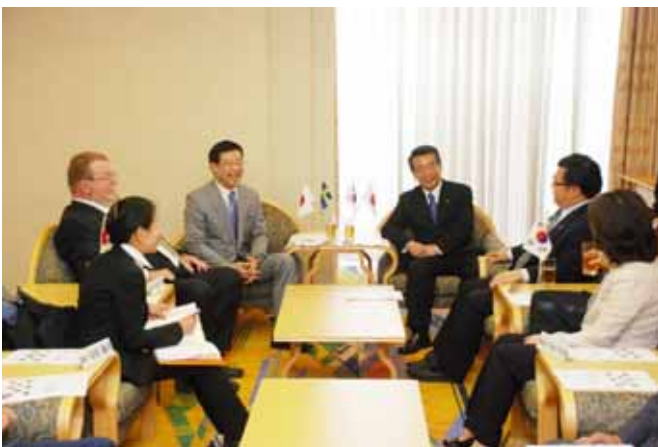
状況を含めまして、いろいろな外傷というものには予防できる。だからこそ私たち行政は、それに向かって努力していかなければならない。予防できるというよりは、できる限り予防していかなければならないのだという思いであります。安心・安全というのはまさにすべての人の願いであり、犯罪からの安心・安全、災害からの安心・安全、病気からの安心・安全、さまざまな安心・安全がありますけれども、こうした1つ1つの安心・安全はバラバラのものではなく、トータルに還元して考えていくことによって、府民のみなさま方の安心・安全を作れるものと思っています。これはハードの面でもソフトの面でも一緒であります。



交通事故を予防するために多くの人が運動を続けていく、それと同時に子どもたちの見守り活動がある、高齢者の見守り活動がある、1つ1つのハードとソフトが結びつくことにより、本当に安心・安全なまちづくりへと進歩していくという風に思っております。

その代表がこのセーフコミュニティであると思っております。そしてそれもただの運動というだけではなくて、世界の20カ国を越える国が参加し、世界中が知恵を出し合って、その安心・安全を求めていく。日本では亀岡が最初でありますけれども、亀岡から世界の安心・安全を求める国々とのコネクションが今できあがる。そのコネクションがまた京都を中心として日本へと広がっていく、という運動を展開していきたいと思っております。

私ども京都府がまさに日本のセーフコミュニティの第1号として亀岡を選びましたのは、別に偶然でも何でもありません。まさに亀岡というのは、ある面では京都の縮図ではないかなという風に思っております。土地としては新しい住宅地もありますし、また古くからのコミュニティもあります。工場も誘致が進んでいる一方で、農業もしっかりと京都の大きな産業の基盤として栄えております。京都の持つ



伝統的な魅力、そして新しい未来への魅力を併せ持つ亀岡こそ私は京都のすべての要素を兼ね備えた、京都にこれを広めていく大きなモデルとなりうる地域だと信じております。こうした取組に対しまして、協力をいただきました栗山市長様はじめ、亀岡のみなさまにも心からお礼を申し上げたいと思っております。

ただ、この試みは第一歩であります。今私どもは認証を目指して活動しておりますけれども、認証も最終目標ではありません。本当にセーフコミュニティが確立され、亀岡が安心・安全のまちとして、そしてモデルとして日本に発信されることによって、大きな目的が達成されると思っております。

どうかその日に向かひまして、みなさまのいっそうのご尽力を心からお願いを申し上げまして、私の開会のお礼の挨拶とさせていただきます。本日は本当にありがとうございます。

-2 主催者挨拶 栗山 正隆 亀岡市長

みなさまこんにちは。たくさんみなさまに今日はご出席をいただきまして、本当にありがとうございます。亀岡におけるセーフコミュニティの推進事業ですが、8月15日に、認証の申請をWHOの方に正式にさせていただきました。そして、昨日と一昨日の2日間セーフコミュニティの第一人者でありますWHOのスヴァンストローム先生をはじめ関係の先生方に亀岡にお越しをいただいて、亀岡の取組の状況を見ていただき、審査をしていただきました。亀岡の取組の状況について、先ほど公表を聞かせていただきましたが、かなり高い評価をいただいているようです。本当にうれしいなと思っております。



この今回の認証取得に向けての取組ですが、認証は取れても、もし取れなくても亀岡は今後いっそう我々が進めてきています安全・安心のまちづくりを進めてまいりたいと思っております。どうかみなさまのご協力を賜りますように、お願いをする次第でございます。

今日はこの後、スヴァンストローム先生、それからパク先生、立命館大学の中谷先生、セーフコミュニティのモデル地区として実践をしていただいております篠町自治会の井内会長、こういったみなさまに講演をいただきますので、講演を聴いていただき、セーフコミュニティに関する理解をいっそう広めて、深めていただきたいと思います。そして、亀岡が本当に安全・安心なまちとして、今後も発展



をしていきますよう、叶う限りの努力をしていきたいと思っております。そして知事の方からも言っていただきましたが、亀岡から日本中に安全・安心なまちとして発信をさせていただきます、さらにセーフコミュニティの取組の輪が広がっていくようにしていきたいと思っております。

今日はみなさま、まだまだ残暑が暑い中をたくさんお越しいただきまして本当にありがとうございました。よろしく申し上げます。



基調講演

-1 What is a Safe Community and How do we get there

Lief Svanstrom (レイフ スヴァンストローム)

スウェーデン王立カロリンスカ医科大学教授、WHOセーフコミュニティ協働センター代表

URL:<http://www.phs.ki.se/csp> E-mail:leif.svanstrom@ki.se

What is a Safe Community?
And
How do we get there?

Symposium for
Safety Promotion in Kameoka
Sept 23, 2007

WHO
Collaborating Centre
on
Community Safety Promotion

Leif Svanström
Karolinska Institute
Department of Public Health Sciences
Division of Social Medicine

I am Leif Svanström
What did I do the last years
as a private individual?

Leif Svanström
Clan leader of 14 (15?)

私はWHOにある、地域レベルでの安全を向上するための安全センターのセンター長を勤めております。私たちはWHOの暴力や外傷などを担当している部署と連携して取組を進めています。それが1つの側面で、もう1つの側面は、世界中に広がっているセーフコミュニティという取組がありますが、それを推進しております。

私は普段、スウェーデンのストックホルムにあるカロリンスカ医科大学で教授をしています。しかしながら、ほとんどの時間、世界中を飛び回っています。今まで私はこのセーフコミュニティという概念を60以上の国で話してきました。そう考えると、まだ70カ国も行かなければならない国があることとなります。しかし、私はそれをやり遂げたいと思っています。



私はスヴァンストローム一人として、14人のリーダーであることを誇りに思っています。14人のリーダーといいましたが、グループといいますが、14人の家族のリーダーということなのですが、そういつている間に15人に増えているかもしれません。なぜなら、私の家族の中ではいつも誰かが妊娠しているのです。だから、今頃15人のメンバーになっているかもしれません。したがって、今日は個人的な話をするのを、お許しください。

私はこの外傷予防について40年以上取り組み、地域レベルでの安全向上に、30年以上関わっていますが、個人的というのはどういう意味かをお話したいと思えます。

2年半前、突然起こったことというのが、この写真にあるとおりです。ぜんぜん予期していなかったのですが、突然4人の孫が生まれてしまいました。私には4人の子



どもがいますが、偶然にも同時期に子どもを出産しました。この写真は左から2人目の子が、洗礼を受けた日に撮ったものです。私のアジア人の孫です。みなさん見てお分かりになると思います。洗礼の式が終わった後に家族で集まりまして、自宅で小さなパーティーを開きました。それぞれの家族が赤ちゃんをこのようなカゴに入れてやってきました。これは車のチャイルドシートです。スウェーデンでは着用が義務づけられています。

これは私が25年前に導入するようにしたものです。そのときは、このようなシートはなかったのですが、今ではスウェーデンのすべての車に、これを備え付けてられていまして、赤ちゃんは、必ずチャイルドシートに座っているという状況になります。その結果、スウェーデンでは、ほとんど赤ちゃんが車の事故で亡くなるということを聞きません。私の娘や子どもたち全員がこのようにチャイルドシートを使っているのを見て、私は非常に誇りに思いました。なぜなら、直接にはチャイルドシートをするように教えたことはありません。ですが、彼ら・彼女たちは自発的にこのように使っているのを見た時に非常に誇らしく思いました。

安全というものは、私が第一に優先するものであるし、私の子どもにとっても第一位の事項です。そのあなた、安全というのはあなた自身の一番の問題です。そこにいる二人の女性、あなた自身の責任の問題なのです。ですが、コミュニティ・地域も、それを支援することができるのです。あなたたちが持っている安全に関する責任は決して人に譲るということができないものなのです。コミュニティはサポートすることはできますが、それをコミュニティに任せるということはできません。

なぜなら、もし事故にあったとき、家族を失ったときに、悲しむのはあなた自身だからです。どんなにみなさんが、自分には責任がないと言い続けても、悲しむのは、みなさん個人の話なのです。この孫が生まれるまで私の人生はもっと簡単だったのです。孫が生まれてからはいつもこの子たちのことが心配でたまらなくなってしまうました。亀岡市では交通事故で亡くなる方が結構いらっしやいます。ですので、亀岡市では、交通の安全というのは、生まれた時から、亡くなるそのときまで取り組むことが必要です。

私の孫たちは非常に泳ぐのが大好きなのです。特に温泉で泳ぐのが大好きで、でもそのためには100%の安全を確保しなければならない。それでこういうようなライフジャケットを発明したのです。これで彼ら・彼女たちは完全に安全になります。スウェーデンはとてたたくさんの水に恵まれた環境にあります。たくさんの川があります。たくさんの湖があります。日本と同様に海に囲まれています。このような中で私たちには水に対する安全というのが非常に大切になります。神様を信じているだけではだめなのです。



これは孫たちが少し大きくなったときの写真です。これを見ていただくと分かる通り、私の庭はいろいろなものがあり自然が豊かです。子どもたちに安全な環境であるために私はネットを張り巡らしました。これは湖を背にして撮った写真なのですが、冬場はすごく寒くなります。なので、薪でストーブを焚きますが、そのときは非常に危険ですのでその周りに囲いをしました。この囲いは絶対に熱くなりません。なので、子どもは触ってもやけどをしませんし、火の危険から逃れることができま



す。

この男の子は、知的障害がありますので、何回教えても無理があるのです。ほかの3人の女の子はもうそろそろ安全について分かるようになってきています。ですが、この男の子に関してはどうしても安全ということを学ぶことができないので、危険には無防備にならざるをえないような状況になります。

これが今の男の子のお母さんです。一番年下の娘で、31歳です。今、2人目の子どもを身ごもっています。彼女は今ご飯の用意をしているところです。コンロの周りに囲いのようなものをしてあるのが、おわかりになるでしょうか。これがあると、子どもは絶対に火にかけてある鍋に触ることができないのです。もし、娘が子どもを意識せずに料理をしていて水が飛び散っても、これがあると絶対子どもにはかからない。私は、日本の台所を見たことがありませんが、おそらく似たような状態にあると思います。でもこれは、家に常に備え付けられているものではありません。やはり購入しないとイケない状況です。みなさんは、小さい赤ちゃんがやけどをしているところを見たことがありますか？たぶん、何人かの方は見たことがあると思いますが、大変ですよ。赤ちゃんは非常に熱に対して敏感です。非常に危険です。人生の中でも一番危険なことです。そう考えると、この囲いというのは非常に安い保険というか、危険から身を守る道具ということになります。



この写真は2人の孫がご飯を食べているところなのですが、これは子どものための専用のイスです。みなさんもこれはお持ちですよ。ご存じですよ。このベビーチェアは、イギアというのをご存じでしょうか、日本にもあると思いますが、そこで買いました。とてもお手ごろな価格です。つまり、私はこれを4つ持っているということなのです。

この障害を持っている男の子なのですが、彼は本当に自分自身をコントロールできない状況にあります。ですので、私たちはいつも彼に注意を払っておかなくてはならない状況にあります。

そのために何が出来るか、1つは安全な環境にするということ。もう1つはお父さん・お母さんがしっかりと見守りを行うということになります。私たちが分かっている「何が危ないか」ということと、子どもにとって「何が危ないか」ということは必ずしも同じではないのです。

私の女の子の孫の1人は癲がありまして、すぐどこかに行ってしまうのです。2秒もあればすぐどこかへ行ってしまいます。森につっこんでいくような早さでどこかへ行ってしまいます。そこには、彼女がおぼれるかもしれない池があります。ほかにたくさんの危険があり



ます。ですので、私たちはいつも子どもたちに対して注意を払っていなければなりません。あなた方も覚えているかと思いますが、子どもというのは動物と一緒にですね。どうしようもない動物と一緒になのです。子どもによっては、その時期が長い、年を重ねてもその時期が続く、ということもあります。おそらく今日ここにいるみなさんにはそういう方はいらっしゃると思うのですが、他のところにはそういう方もいらっしゃる。



これは男の子が二歳半の時の写真ですが、彼がようやく歩くということを学び始めたところです。ですが、安全のために常に補助具をつけています。私たちが子どもの時は安全なブランコはありませんでした。ですが、技術の発展によって、ますます安い価格によってより安全性の高いものを手に入れられるようになってきているのです。



これを見てわかっていたきたいのは、大人の行動というのが子どもにどのような影響を与えているかということです。この3人の孫がどんなスポーツが好きかこの写真を見ておわかりいただけますか？彼らは大きくなったときには必ずラウンドホッケーをするようになります。息子たちもラウンドホッケーが好きだったので、やっぱり彼らの子どもも好きになってしまいます。こんなステイックなんか持たせたら振りかざして危ないのは目に見えているのに。何でこんなことをさせるのかと、おじいちゃんの私は首を横に振るばかりです。

でも、もし私が思っているように世の中がいけば、子どもたちにとってはきっとつまらない世界になっている

と思います。ですので、私たちは彼らにとって人生が退屈でつまらないものにするのではなく、いかにこういう楽しみをうけながら、安全ということを確保できるかということを考えるということが私たちの役目になります。

私は釣りが大好きです。息子もそうです。なので、彼の娘もやっぱり釣りが好きです。いまこれはちょうどネットを持って釣りに出かけているところです。彼女の身につけているものを見てください。これは大きいボートに乗ったときには簡単に脱ぐことのできるジャケットです。池に落ちたりしたときは、ほとんどの場合水は冷たい。もしベストを着ていなかったら1秒以上は我慢できない。もしみなさんが落ちたりしても、命を守るために、まずできる予防というのは、良いジャケット、暖かいジャケットを着ることになります。

湖に行くまでに階段があります。100段ありますが、段差がみんな同じにしてあります。もし、段差がバラバラ



だったら、必ずこの子たちは転びます。大人もそうだと思います。この段差のそれぞれの差というのは3mm以上あっては危ないです。そうでなければ、必ず落ちてしまいます。子どもというのは、段差は同じということを前提としていますので、その予測がはずれると、転落しやすくなってしまいます。

4つの手すりがあります。一番高いところに、両手を伸ばしてつかむことのできる手すりがあります。その下の低い段のところにもう1つつけてあります。それは子どもが握ることができる手すりでありました。転倒は一番重大な事故でもあります。なので、彼女たちは大人たちを前にして、2人で手をつないで、手すりを持ちながら歩いています。



ではまた、私の経験に基づいて少しお話をしたいと思います。まず個人レベルでみなさんが安全について何ができるかをお話ししたいと思います。グループで、私の家族もある種グループといってもいいですが、そのレベルで何ができるかをお話ししたいと思います。

それでは、どうやってコミュニティレベルで、地域レベルで、社会レベルで世界を安全にできるのでしょうか。そのためにはまず、自分の経験を広めていくということが大切です。なのでえ、私は、コミュニティレベル、地域レベルでの安全の向上というのは非常に大切だと思います。どう思いますか？同意していただけますか？

		Safety Promotion												
Level	Sector	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13
International														
National														
Community														
Organisation														
Group														
Individual														

Safety Promotion done by the individual

Community level, regional level, social level, world level, safety improvement is very important. Do you think so? Do you agree?

亀岡市役所のみなさん、篠町、保津川町の自治会の皆さん、昨日はありがとうございました。昨日お話しいただいたことや視察したことは、みなさんもお聞きになったらきっと感心されると思います。おそらく他の地域も、自治会もきっと同じような取組をされていると思いますし、もしそうでなくてもみ

		Safety Promotion												
Level	Sector	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13
International														
National														
Community														
Organisation														
Group														
Individual														

Community Safety Promotion

なさんご安心ください。市の職員や亀岡市セーフコミュニティ推進協議会のみなさんたちがきっと広めてくれるはずです。

コミュニティレベルの、地域レベルの安全というのが、私たちが言っているセーフコミュニティというものの意味になります。様々なレベルで安全の取組ってできるのですね、個人、グループ、組織、国や、地域や、社会や、そして世界レベルで取り組むことができます。セクターというのはいったいどのように考えられているのでしょうか。

4人の赤ちゃんがチャイルドシートに座っている写真を覚えていらっしゃいますか？あれが交通事故の安全というものをまさに象徴しているものです。これは私たちが交通安全にかけてきた努力の結果が、あのような写真にあらわれていたわけです。もう1つが水の安全です。今学校に入る前に、幼稚園や保育園で水の安全について学びます。私たちは安全への希望というものを作り上げていっているのです。安全な遊びも作っています。この子たちをどんどんこういう環境で育てていくことによって、安全

がどんどん広がることとなります。安全なスポーツ、安全な公共施設、どんどん概念を広げていくことができます。

そのようにコミュニティレベルで安全に関して取り組んでいる人たちが、一緒になって分野の垣根を越えて取り組まなければならない。たとえば行政の方で、交通の担当の課の方たちが、「私たちは最大限の努力をしているんですから、他の部署のことは他の部署のことなので関係ない。」とやっていては、意味がないことなのです。彼らたちは、警察だとか学校だとかいろんな分野の人たちと協力して進めていかないといけないのです。安全な環境というものを作り上げるため、すべての家庭、すべての学校やすべての組織が、協力しないと作り上げることはできません。



Indicators for International Safe Communities

Safe Communities have:

1. An infrastructure based on partnership and collaborations, governed by a cross-sectional group that is responsible for safety promotion in their community;
2. Long-term, sustainable programs covering both genders, all ages, environments, and situations;
3. Programs that target high-risk groups and environments, and programs that promote safety for vulnerable groups;
4. Programs that document the frequency and causes of injuries;
5. Evaluation measures to assess their programs, processes and the effects of change;
6. Ongoing participation in national and international Safe Communities networks.

セーフコミュニティには6つの指標というのがあります。セーフコミュニティになるためにはこの6つの指標を満たさなければなりません。

1つめはより安全な地域づくりを目指して分野や領域の垣根を越えて共同で取り組む組織があるということ、2つめはすべての性別・年齢・環境・状況を対象にして長期かつ継続的なプログラムがあるということ、3つめが危険度の高い集団、例えば危険な年齢・地域・環境に焦点をあてたプログラム、弱者を対象としたプログラムがあること、4つめが外傷の

頻度・原因などを記録するプログラムがあること、5つめがプログラム・取組の過程・取組の結果・効果をアセスメントするための評価基準があること、6つめが国内及び国際的なセーフコミュニティのネットワークに積極的・継続的に参加すること。

亀岡市ではすでに1番の垣根を越えた組織というのは設置されていますよね。今その組織に求められていることをさらに発展させていくという取組になります。私は思うのですが、スポーツの安全というものにもっと取り組んでいくグループがあってもいいのではないかと思います。あと、職場の安全というものに取り組むのも大切だと思います。もっとコミュニティレベルでの人々をサポートするような仕組みがあってもいいのではないかと思います。

地域レベルでの人たちも今とても熱心に取り組んでいます、最新のデータ、最新の取組、最新の技術をどうしても持ち合わせないものがあります。そういうときに必要なのが、都道府県だとか、国レベルだとか、あるいは国際的なレベルから得ることができる様々な技術や知識だったりするわけです。ですから一番大切になるのは、センターとなるグループだと思います。中心となるグループは何かというと、国際的、国レベルからの知識やノウハウを地域レベルまで落としこんであげるといった役割ができるもの、そして地域での取組や地域でのノウハウを国レベル、国際レベルに持ち上げていく、この二つの方法を担う組織というのがセンターグループの役割になると思います。



ですから私たちは日頃から、国際的な大会・会議・コンテストを国レベルでやったり、地域レベルでやったり様々なレベルでやっている訳なんです。この活動というのは、終わることのない取組なのです。これから、何百年たっても続けて行かなくてはならない取組なのです。

男性と女性ではそれぞれさらされている危険というのが異なってきます。すべての年齢層にそれぞれ危険な要因というものがあります。あらゆる環境によって危険要因というのは異なってきます。すべての環境・状況に危険

というものは形を変えて存在します。あなた方にアドバイスしますのは、サーベランスシステムを持つことです。みなさんは、まだサーベランスシステムを始めたばかりで、データがまだできていません。ですので、スリリングなこれからの取組になります。このデータが出たときに、データをもとにみなさんの生活の中で何が危険なのか、危険要因なのかが見えてくるのです。いわゆる、弱者といわれる方は、一般の方よりも危険となる要因がたくさんあります。

5つめは自分たちの取組を評価するという仕組みを持ってください。亀岡市には大学がございますよね。京都市内にも、府内にも大学がありますよね。そのような専門機関と提携して、しっかりとした評価基準を持ってください。大学の多くは大変なのです。生徒の卒業論文のテーマを探すのに必死になっています。そういう人たちを使ったら、ほとんどタダで助けてくれるのではないかと思います。強いていえば、お茶の1・2杯でも出してあげれば、喜んで私たちを助けてくれるのではないのでしょうか。

6つ目は、国レベル、国際レベル、ローカルレベルでこのように情報の交換というようなことをしてほしいと思います。どうかみなさん、恥ずかしがらずに、遠慮せずにどんどん世界や国レベルに出てってください。国際レベルで見ても、みなさんがされていることというのは、決してひけを取らない。どうか、たくさんあるアジアの国々にみなさんが日頃の生活の中でやっている取組を紹介してください、共有してください。そして、彼らがみなさんのやっていることを真似できるようにサポートしてあげてください。

11月22日から25日の間に、タイのバンコクでセーフコミュニティでの大会があります。どうかみなさん1人でも多くの方に来ていただきたいと思います。話を聞きに来るだけでなく、みなさんがやっている取組をぜひ紹介してあげてください。みなさんの中には、英語ができないから、という方がいらっしゃると思います。全然心配しないでください。みなさんの周りに誰か、英語のしゃべれる人がいるでしょう。その人に、ちょっと助けてって言ってください。もしいかなかったら、ここにいるチョ教授に、ちょっと助けてください、といってください。

この写真を見ると、これから私の孫が、これから始まる、長くて、暗くて、寒い冬に備えているというのが見ていただけだと思います。どうです、空がみなさんにハローと手を振っています。これから、半年の間に私にはあと3人の孫が生まれる予定ですので、間もなく7人の写真がここに飾られることになると思います。もちろん、アクシデントゼロの場合ですが。どうかみなさん安全向上のために取り組んでください。

この写真は、この2日間亀岡市で見せてもらった、取組の内容です。おそらくみなさんが関わられている活動があると思います。もしかして、みなさんの取組も日本で初めてのセーフコミュニティになるのではないかと思います。長時間にわたり、ご静聴いただきありがとうございました。



Good luck to Kameoka!
-The first designated Safe Community to
be in Japan?



逐次通訳：白石陽子((株)マチュールライフ研究所)

-2 Key issues and challenges on Safe Community in Korea

Nom-Soo Park 韓国アジョ大学医学部外傷予防及び地域安全向上センター准教授



私は、韓国のスウォン市にあります亜州医科大学にある認証センターというところに所属しています。まず、みなさまのこれまでのセーフコミュニティへの取組に対して敬意を表したいと思います。みなさまのこれまでの取組というのが、亀岡がより安全な町になるためのしっかりとした基盤づくりにつながってきていると思います。今日はここにお呼びいただけてうれしく思っています。

今日、私がみなさまにお話ししたいと思っておりますのは、現在韓国で行われておりますセーフコミュニティ活動における課題と、それへの挑戦についてお話ししたいと思います。



まず、韓国がどのようなセーフコミュニティの取組をしているかということをお話ししたいと思います。韓国が初めてセーフコミュニティへの取組を始めたのは、1999年になります。現在8つのコミュニティがセーフコミュニティの認証を受けるため、取組を進めています。そのうちの2つが認証を受けております。1つがスウォン市で2002年、2007年にチェジュ島が受けております。最初に認証を受けたスウォン市は、来月の4日に再認証をされることになっています。

また、自分たちのコミュニティの中でセーフコミュニティのプログラムを進めようとしている地域が7つあります。

今みなさんにお見せしているのは、セーフコミュニティ支援センターが提供しているセーフコミュニティの取組の全体像になります。

第一段階は、何が地域の課題であるか、何が危険要因であるかということをはっきりとすることから始まります。課題や危険要因を見つけたしたら、その次に、それをもとにどうやってその課題を解決するかを考えるというステップに入ります。

その次の段階に、実際に計画を実行に移し、それを評価し、プログラムを改善するというになります。このフィードバックをした後に、プログラムを増やしたり、ターゲットを増やしたり、拡張していくことになります。地域レベルのプログラムの場合は、コミュニティからの草の根的な動きが継続することで非常に大きな力を発揮します。ですので、私たちがセーフコミュニティの取組を始めるときに、まず最初に教育だとか、周知のための方法だとか、外傷予防だとか、安全とは何かとか、安全の向上だとかということに対する教育、あるいは周知・啓発が非常に大切になります。



次に、大きな課題についてご説明したいと思います。もっとも大切なのは、外傷というものをしっかりと理解をするということです。取組をする上で、外傷というものを十分に理解せずに、正しい取組を進めるのは難しいことです。みなさんは、外傷や安全と聞いて何を思い浮かべますか？

韓国は、西洋とは違う概念があります。みなさんの前にあるのは、WHOの安全や外傷に関する資料です。この、WHOの取組を進めるに当たって、交通事故というものに重きを置いています。

韓国では交通安全というのは警察の仕事だと考える傾向があります。決して、保健や健康分野の人たちの仕事ではないと考える風潮があります。なぜそれなのに、健康政策を進めているWHOが交通安全というのを進めているのでしょうか。

セーフティープロモーションは、人は大切という考えの上に立つと、よりよい社会を作るための方法をいうことになります。そのためには、健康というものに対する考え方をちょっと変えてみる必要があります。何が、私たちの幸せで健康な生活に、影響を与えているか考えてもらいたいと思います。たくさんの病気やケガなどがあります。私たち誰もが、病気やケガをしないで幸せに生きたいと思っています。健康と安全というのは誰もが持つべき平等な権利です。多くの場合、病気というのは健康問題ととらえますが、なかなかケガ・事故というのはそのように考えない傾向があります。

外傷というのは交通事故だけでなく、ケガとがいろいろな要因も関わってきます。ケガというのは、健康問題なのですね。それは個人だけの問題ではなく、社会に対して大きな負荷を与えています。例えばケガが元で障害を持ってしまつとか、社会に対する経費面でも非常に負荷がかかってきます。包括的にこの外傷を予防するためには、多面的な取組というものが必要になってきます。安全というのは、健康の増進、あるいは福祉の増進のためには必要条件です。セーフティープロモーションの取組というものは、人々がどのように安全というものを理解しているのか、そしてどういった方法を自分たちの地域でとるべきか、を理解するということにあります。

2つ目の課題は、外傷の予防の可能性になります。外傷というのは予防ができる病気というふう考えること

Issues and Challenges

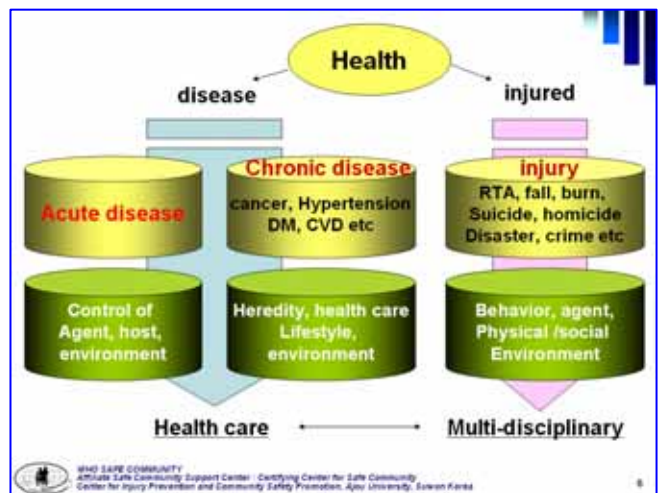
- injury and violence - major Health problem
- Insufficient awareness and understanding of injuries

WHO SAFE COMMUNITY
Affiliate Safe Community Support Center - Certifying Center for Safe Community
Center for Injury Prevention and Community Safety Promotion, Ajou University, Suwon Korea

WHO recommends that member countries implement daytime running lights for two-wheeled vehicles. They should also consider the use of daytime running lights on four-wheeled vehicles.

WHO recommends that member countries set and enforce speed limits appropriate to the function of specific roads.

WHO SAFE COMMUNITY
Affiliate Safe Community Support Center - Certifying Center for Safe Community
Center for Injury Prevention and Community Safety Promotion, Ajou University, Suwon Korea



Issues and challenges

- Injury – preventable disease
- Neglecting disease

WHO SAFE COMMUNITY
Affiliate Safe Community Support Center - Certifying Center for Safe Community
Center for Injury Prevention and Community Safety Promotion, Ajou University, Suwon Korea

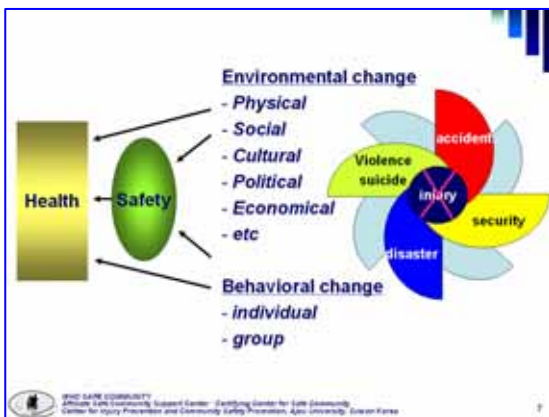
- **injury = preventable disease**
 - risk age group
 - risk agent
 - risk environment
- **Burden of Injury**
 - cause of death and non-fatal health problem
 - cause of disability
 - socio-economical losses



WHO SAFE COMMUNITY
Affiliate Safe Community Support Center - Coordinating Center for Safe Community
Center for Injury Prevention and Community Safety Promotion, Ajou University, Suwon Korea

もできます。ある人は、このことを病気の放置と呼ぶこともあります。

多くの人は、事故によるケガは避けることも、予測することも、予防することもできないと考えがちです。でも、外傷の予防は、病気の予防と非常に似ているといえます。もし、何によって外傷ができたかということを理解できれば、どうやってそれを予防できるかということにつながるわけです。最終的な安全というゴールに向かうために安全向上する、外傷を予防する、治療・リハビリをするということを、組み合わせてアプローチしなくてはならないのです。

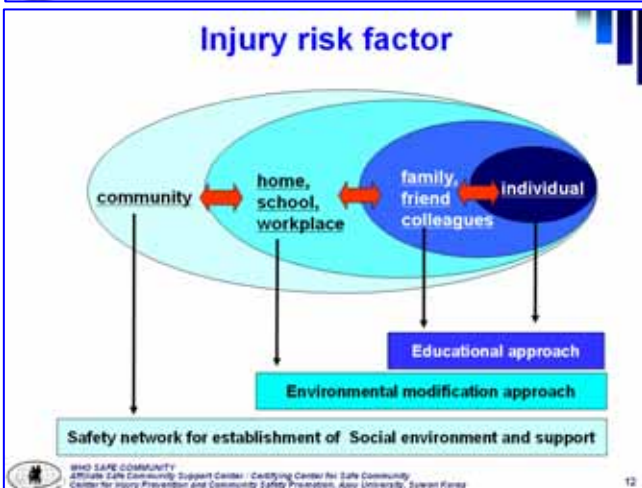


例えば、車と自転車が衝突した事故があったとします。もっとも理想的な方法は、車道と、自転車道を分けて設置するという事です。でも、それは、デザインをし直したり、設計をし直したり、作り直したり、とても難しいことです。

このため、2つ目にできることは、教育とか、規制ですよね。事故で頭を打つのを避けるためにヘルメットを着用する、などが考えられます。最初に言いました、環境的な変化、道路の改装だとかヘルメットを着用する法規制だとかは、事故が起こる前にできることです。事故が起こった後にしなければならぬことというのは、医療的ケアやリハビリであったりするわけです。この中でもっとも効果的な方法は何かと考えたときに、ケガをする前に事故が起こるのを防げば、一番効果的な方法なわけです。



3つ目は、安全の向上は非常に複雑で複合的なものだということです。いかに安全な町を作るかということには、個人の取組、グループの取組、コミュニティの取組、いろんなレベルでの取組が組み合わされる必要があります。行動の変容、環境の変容というのは、より継続的な安全という環境を作るのに必要となります。社会構造を変えるというのは、人々の生活と健康と、社会構造を理解する大きな助けになります。人々の環境と社会的要因の産物の結果と見た場合ですね、知識とそれによって得られるものを基盤とした解決法を見つけようといったこととなります。



Issues and challenges

- Injury prevention & safety promotion : complex and multi-disciplinary
- Multi-sectoral nature of strategies

WHO SAFE COMMUNITY
Affiliate Safe Community Support Center - Coordinating Center for Safe Community
Center for Injury Prevention and Community Safety Promotion, Ajou University, Suwon Korea

この取組をするとき、1つの分野だけで取り組んでもうまくいかない、いろんな分野の取組が協力して、初めて安全が確立されることとなります。ですので、私たちは一緒に取り組むということが必要となります。でも、保健の分野以外では、ケガというのは健康問題だと考える傾向が、まだまだ低いようにと思います。先ほどもみなさんに見ていただいた6つの指標というのに沿って見てみますと、私たちはそれぞれ自分たちの分野だけに固執するのではなく、範囲を広げ、他の分野の人たちと交わって行って、一緒に取り組むということが大切になります。

Sustainable development of Safe Community

WHO SAFE COMMUNITY
Affiliate Safe Community Support Center - Coordinating Center for Safe Community
Center for Injury Prevention and Community Safety Promotion, Ajou University, Suwon Korea



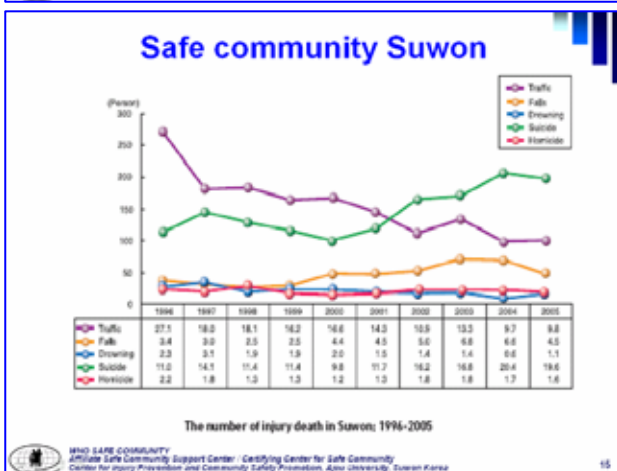
次に、スウォン市の取組を元に、コミュニティでどのように継続的なセーフコミュニティとしての発展をしてきたかを紹介したいと思います。



図を見てください。これを見てみると、死亡率というのがだんだん下がってきていると思います。

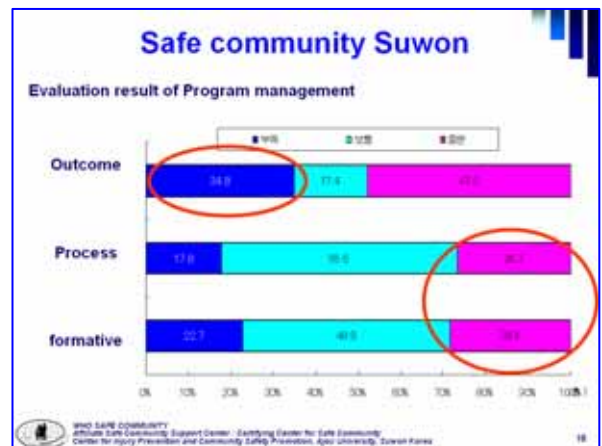
紫の折れ線グラフ、交通事故になりますが、これはだんだんと減ってきています。一方で、自殺の数が、非常にのびてきているのが、見ていただけたと思います。

特に14歳以下の交通事故の数というのが、非常に低く、ゼロになっています。その中でも4歳以下というのが、非常に低くなっています。



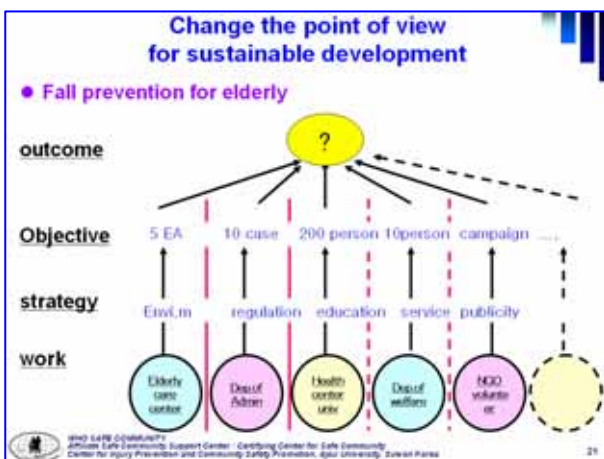
セーフコミュニティの評価の指標を見ていただくと、子どもや高齢者にとって、家庭内というのが、危険の要因になっていると思います。私たちの取組のフィードバックを見ていただきますと、教育によってこの取組が効果を生んでいるということが分かります。

この図を見ていただきますと、一番左が満足していない、真ん中がまあまあ、右が満足しているということになりますが、これを見ると、8年前、プログラムを始める前の満足度は非常に低いですが、取組が終わった後の結果を見ると高くなっている、ということが分かります。



Safety promotion program

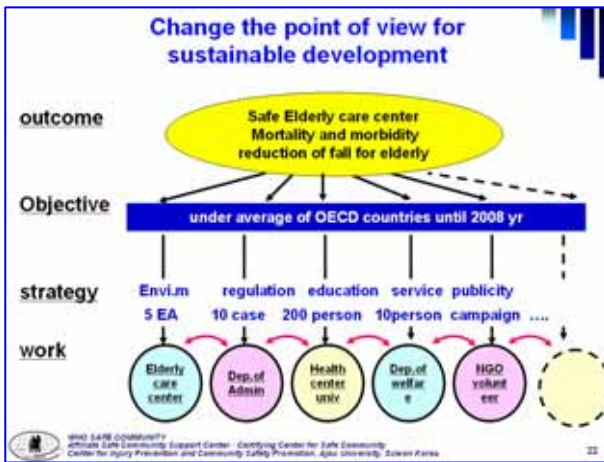
- ✓ **Goal?**
- ✓ **Specified objective ?**
Long-term, mid and short term
- ✓ **Target age group?**
infant, child, adolescent, adult, elderly
- ✓ **Target environment?**
Home, road, school, workplace etc.



それで、私たちは、コミュニティの方に、次のような指導をしています。まず、このプログラムをどう見えていますか、何なのですか、ということをお聞きかけます。次に、目標は何ですか、と聞きかけます。どの年齢層にこのプログラムを用いますか、と聞きかけます。次に、どのような環境を取組の対象にするか、ということをお説明します。外傷予防と安全向上のためのプログラムを作るに当たって、どのようなケガを対象にしますか、それを予防するためにどのような取組をしますか、どのような組織と協力して取り組むことができますか、そして最後に自分たちの取組をどうやって評価しますか、ということをお聞きかけます。

例えば、地域というのがより安全な場所となるためには、いろんな分野の方が、一緒になって取り組む必要があります。例えば、高齢者の方が安全に生活を送るためには、そういう人たちが一緒になって取り組む必要があるのか、ということをお考えいただければ分かります。

例えば、それぞれの取組において、それぞれのやり方があって、それぞれの目的があって、高齢者の



まず大切なのは、すぐに終わるようなプログラムではなく、長く続けられるような取組というのを、それぞれの専門分野が連携して、進めていくということが大切になります。

みなさんに1つ伺います、セーフコミュニティの効果って何でしょう？もし、あなたの地域がセーフコミュニティの取組を始めたときに、あなたはまず何をしたいですか？もちろん、まず最初に思うのは、ケガが減る、それによる負担を減らすということです。私たち誰もが、安全と健康というのは等しく持つ権利があります。それは私たち個人個人が同様に、行政であったり、国であったり、地域であったりそれぞれがそれを担う責任があります。安全を向上させる取組というのは、地域の財産である私たちに対するもっとも効果的な投資であるといえるのではないのでしょうか。

最後になりますが、みなさんにこのセーフコミュニティという概念を正しく理解していただいて、みなさんで、協力して取り組む、つまりコミュニティレベルで取り組んでいただくことが、地域がもっとも安全でかつ、みなさんが健康で過ごすことができる、亀岡市になる近道になると信じています。

ありがとうございました。

安全という同じゴールを目指して取り組んでいます。

しかし、どうしても高齢者の転倒による死亡の率や受傷率を、良い方向へ向ける効果を得るのはとても難しいことです。みなさんは、最終的にはどのような効果を得たいと思っているのでしょうか。ここで必要なことは、プログラムを継続していくことです。

まずは、共同の目標を持って、そこに向かってビジョンを持って取り組むということが大切になります。それぞれの分野が、自分たちの専門性を最大限に生かしながら、連携して進めていくことが大切になります。



逐次通訳：白石陽子((株)マチュールライフ研究所)

報告講演

-1 社会調査からみたセーフコミュニティ活動の課題 ～安心安全と健康をつなぐ社会的結びつき～

中谷友樹 立命館大学文学部人文学科地理学専攻准教授



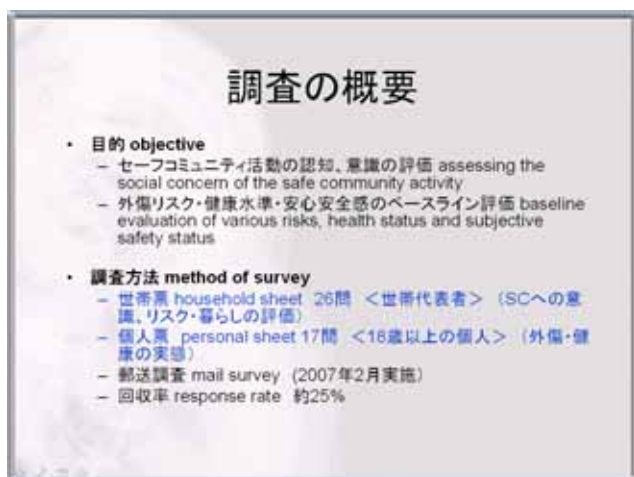
全体は5部から構成されておりまして、この調査でどのようなことをやったかという紹介と、それをふまえて、今現在、亀岡市の中での外傷と健康に関する実態を整理します。そのあとで、健康や外傷をめぐって決まっているであろうと思われる、安心・安全な暮らしができていくかという実感について整理させていただきます。最後にこのセーフコミュニティ活動に関して、参加の可能性やその所在というものについて、セーフコミュニティへの関心をお聞きした部分から、整理させていただこうと思います。



1 調査の概要

この調査は主に、2つの目的を持って行いました。1つは、セーフコミュニティ活動に亀岡市は昨年取り組んでいるわけですが、その活動が認知されているのかどうか、そして賛同していただいているのかどうか、こういったセーフコミュニティ活動に関する可能性を探ろうという点がある。

もう1つは、第1段階に行うのは、外傷のリスクというのがどうなっているのか情報を集めることだというのがありましたけれども、それを集めよう、整理しよう、外傷リスクに関する1番最初のベースラインを調査しようという。そのほかにもいろんなアイデアをお持ちの方がいらっしゃると思いますので、そういったアイデアを募集するという意味合いもございましたが、今日は割愛させていただきます。



調査方法は、いわゆる郵送調査といわれるものがありますが、各世帯に、世帯に関する質問と個人に関する質問をそれぞれ調査票にまとめて、これを郵送で回収いたします。

調査の配布に関しましては、自治体の広報誌・回覧を通して配布いたしまして、亀岡市民のみならず



調査組織

- ・ 田中 秀門 (亀岡市役所企画課主任主幹)
- ・ 八田 直哉 (京都府企画環境部企画参事付 企画主任)
- ・ 白石 陽子 (立命館大学政策科学研究科博士後期課程・マチュールライフ研究所)
- ・ 本田 豊 (立命館大学政策科学部教授)
- ・ 松田 亮三 (立命館大学産業社会学部助教授)
- ・ 中谷 友樹 (立命館大学歴史都市防災研究センター准教授・文学部兼任)

調査にご協力頂きました、京都府、亀岡市、自治会関係者ならびに地域住民の皆様には、深く感謝申し上げます。

の9割以上の世帯をカバーしました。

回収率は4世帯に1世帯がご回答いただいているという状況であります。地域ごとに若干の温度差はあるものの、軒並み高い回収率を達成できたのではないかと思います。

調査組織ではありますが、私を含めまして、このようなメンバーで調査票を企画して実施いたしました。調査票をお読みいただきましたみなさま方には、深く感謝申し上げます。

2 外傷と健康の実態

それでは集めましたデータについて、順次整理させていただきたいと思いますが、まずは外傷、そして健康に関する主観的な評価、みなさんが自分自身でどう思っているのかについて、個人レベルで集めた情報から整理したいと思います。

これは主に個人票から得ているものでありまして、18歳以上の方が対象になっております。子どもに関しては入っておりません。子どもに関しては世帯表で質問しているのですけれども、今回集計が間に合いませんでしたので、18歳以上の方だけでお話しさせていただきます。

個人票では何を聞いているかといいますと、過去1年間にケガや転倒をしたことがあるかどうか。ケガの内容はどのようなものなのか、そして自分で自分の健康をどう思っているのか、ということに関する調査。そして、個人をつないでいるネットワークの状況、気軽に相談ごとができる知人や、何かあったときに助けてくれる身近な人々がどれくらいいるのか、そういった指標を質問しています。

これが、ケガの経験を整理したものです。左側が男性で、右側が女性です。年齢別になっておりまして、緑色が、一年間1度もケガしませんでした、黄色がケガしたけれど医療機関に行かなかった。オレンジ色が通院したことがある。赤色が入院したくらいひどいケガをしたという分類です。男性も女性も若干40代で高く、若年層も高くなっており、これは、おそらくスポーツ中にケガをするのが多いと思います。また、高齢者層で60歳を越えまると、ケガの経験が上昇していくことが分かり、年齢差がはっきりしていることが分かります。

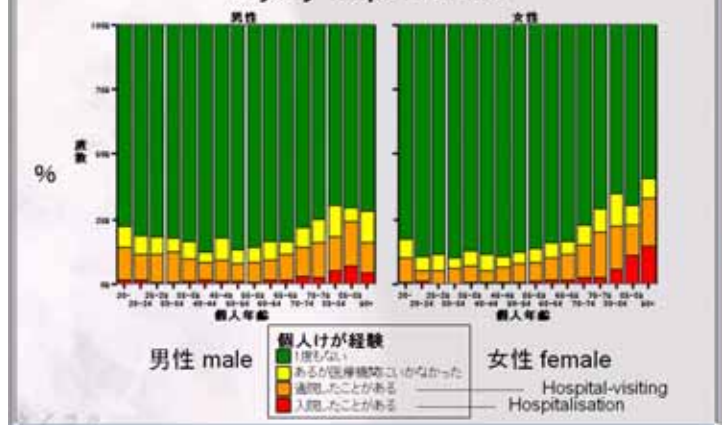
ケガをする頻度でいえば男性の方が多いのですけれども、深刻さの度合いからいうと女性の方が深刻なことが多いということも高齢者層でははっきりしております。これは通院と入院をしたケガに絞って、どこでケガをしたのかというものを整理したものです。

ケガをする頻度でいえば男性の方が多いのですけれども、深刻さの度合いからいうと女性の方が深刻なことが多いということも高齢者層でははっきりしております。これは通院と入院をしたケガに絞って、どこでケガをしたのかというものを整理したものです。

指標について indicators

- ・ 過去1年間のけが・転倒の経験 Injury & falling experience
 - 通院・入院の有無と内容
- ・ 主観的健康度のサマリースコア(身体的・精神的) Summary scores of physical and mental health condition based on SF8
 - 主観的な健康評価は、生活の質を評価する重要な指標である。
- ・ ネットワーク指標 social network
 - 相談ネット: 気軽に相談ができる親族や友人・知人の人数

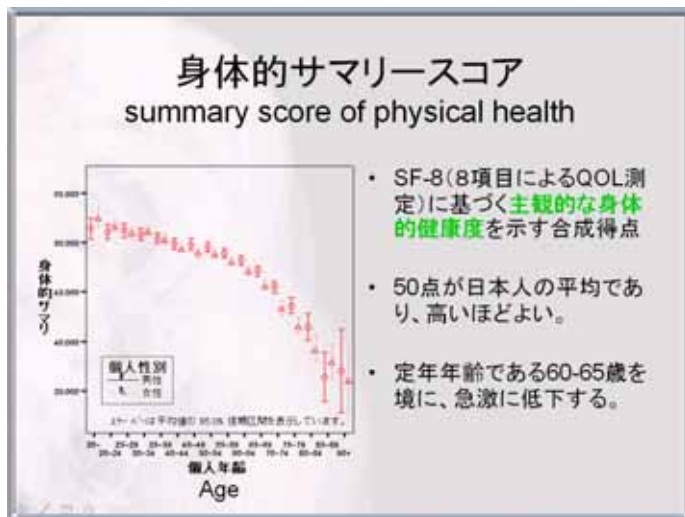
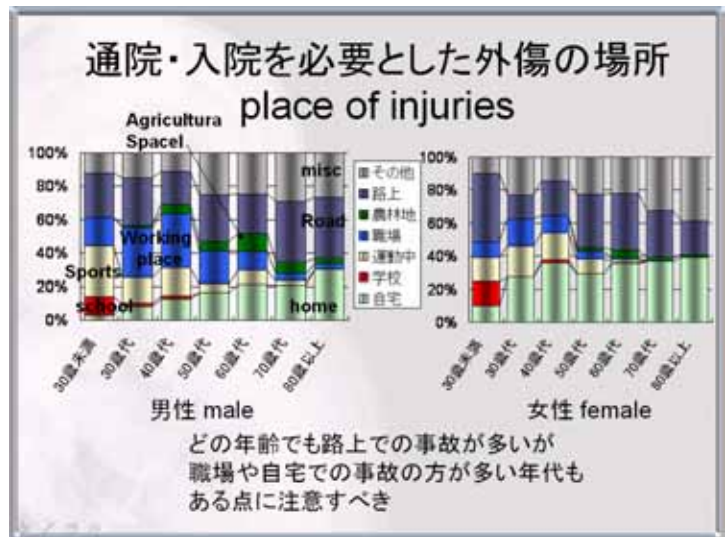
けがの経験(過去1年間の通院・入院の有無) injury experience



年齢階級別に場所を6種類に分けました。左側が男性ですけれども、一番下が自宅、次が学校、次が運動場・体育館、職場、道路上、それ以外区分できないもの。

住環境が集計しておりますので、区別が難しいところがございます、若干まだ怪しいところもいっぱいあるのですが、学校ってというのは、だいたい体育の授業中や部活動中に起きている、スポーツとかなり関係が深い。農林地というのは、職業で農業をされている方が作業中にぎっくり腰になるパターンが多いようになっています、道路上はやはり交通事故が多いのですが、中には犬に噛まれたや、殴られたというような犯罪めいたものの中には混ざっています。たいていは車にはねられたとかそういうものです。

一方、自宅の方ですけれども、多岐に渡っていて集計が難しいのですが、段差に躓いてというのが高齢者層では明らかに多くなっています。ムカデに刺されたなどもあります、その辺の細かい状況は別の機会に集計させていただきたいと思います。



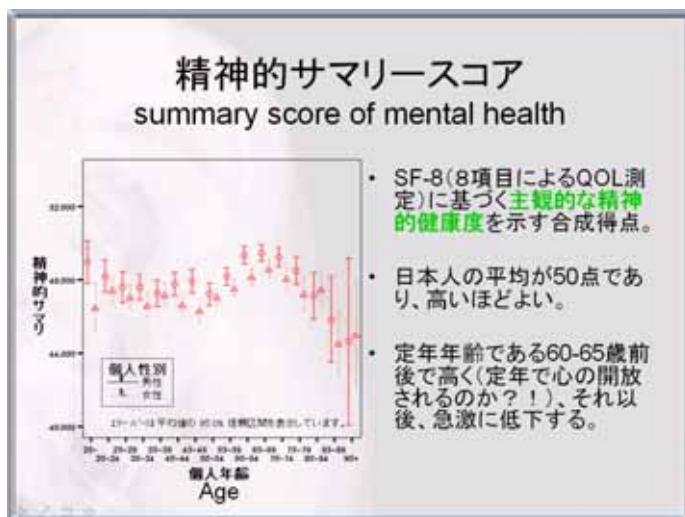
これは視覚的に見て自分が体の痛みを覚えて仕事ができなかったとか、そういったフィジカルな面において健康かどうかを質問した集計結果です。

これは8項目の質問を集計してつくられる得点ですけれども、上の方が健康的となります。日本人の平均が50点となっているのですが、これは年齢に伴い、60代ぐらいからポイントは低下していきます。この辺は常識と照らし合わせても違ってこないと思います。

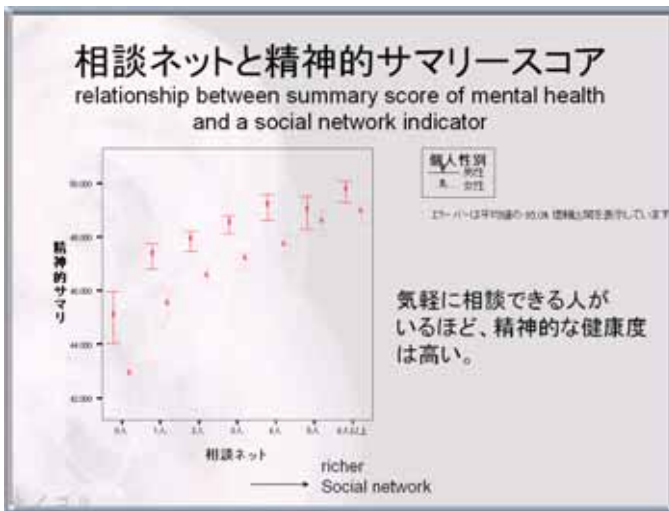
次は精神的な面での健康状態で、気分が落ち込んでいる、仕事がうまくいかなかった、そういったものについて集計したような得点があります。これも8項目の質問を合成して作られているものでありまして、上に行くほど健康的ということになります。

横軸は年齢階級、男性と女性で区別されています。これも50点が日本人の平均で、それを信じてしまうと亀岡市のみなさんはあまり健康でないということになってしまうのですが、調査のベースとなっている時期の違いがありますので、あまり深く考えないください。

このスライドを見てみますと、60代から、高齢化に伴い精神的に落ち込む度合いが進んでいくというのが分かるのですが、見ている

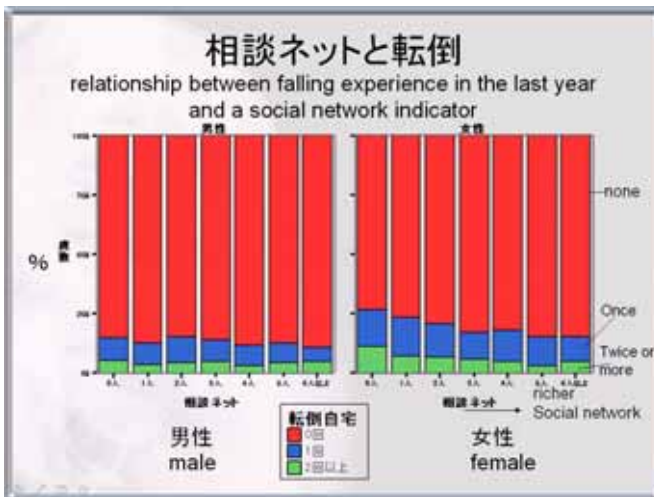


と1回下がって上がるという傾向があります。よく見ていただくと、40代ぐらいが1番落ち込む時期



こういったものが、こういったものと関連して健康状態に影響するのかについて、いろいろな指標で調べてみたのですが、非常に関係が深かったのは、気軽に相談できる友人や知人がどれくらいいるのかということです。上のスライドで右側が気軽に相談できる人が6人以上で、左が誰もいないという方なのですが、特に精神的なスコアは友達がたくさんいる方が、あきらかに男性も女性も優れています。

転倒というのは非常にケガの大きな要因になるのですが、特に女性に関してみますと、フットワークが豊かな人ほどケガにあう可能性が低くなっていくということになります。これは因果関係にあるかもし



だったりします。この辺りが、中間管理職の自殺の問題と関係するように思うのですが、この時期に社会的責任が重くのしかかってきて、子どもの成長を見守る上でも重要な時期になっていると思います。こういった時期を精神的にうまく乗り切れるかどうかというのは、重要だと思います。

60代で一番状態がいいというのは、世間では定年になって仕事を失った人がブルーになって来るとい話がありますけど、むしろ逆でもうすぐ定年だということで、その前後が一番心の上では健康なのかもしれません。

れられません。ケガをしたことによって、女性の方はより内に籠もってしまう、ということかもしれません。いずれにしましても、ケガや転倒などという外傷の機会というもの、社会的な結びつきの度合いという間には、密接な関係があって、ある一面では豊かな人間関係を築いている人の方が健康的にされるという面がありますし、逆に転倒やケガを契機にして、自分の生活の質を落としてしまう、ネットワークを失うということも起こりうる、ということを示唆しています。

- ### まとめ
- **けが・転倒の経験は、性・年齢に応じた特徴をもっている。**
- There exist clear patterns of injury & falling experience depending on age and sex.
 - **けがや転倒の経験は、身体的・精神的な健康度(生活の質)を低下させる。**
- Injury & falling experience lowers both physical and mental health status
 - **「孤立」することは、精神的な健康度を低める重要な危険因子であり、女性の場合、転倒など外傷経験とも関係しやすい。**
- "isolation" is a major risk to worsen mental health status

整理いたしますと、ケガや転倒については、明らかに性や年齢に応じた特徴を持っておりますので、それに対応した今後の施策を考えていくことが当然必要であります。それから、ケガや転倒の経験というものは、身体的・精神的ともに健康というものを目指すポイントになってくることは、間違いのないと思います。そして、社会的に孤立するというのが、精神的な健康を低めるとか、重要な要因になっていることは過去の経験からいっても間違いのないかと思ひます。

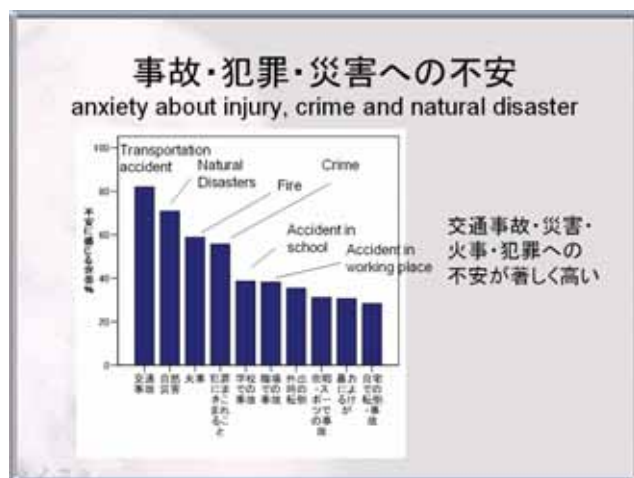
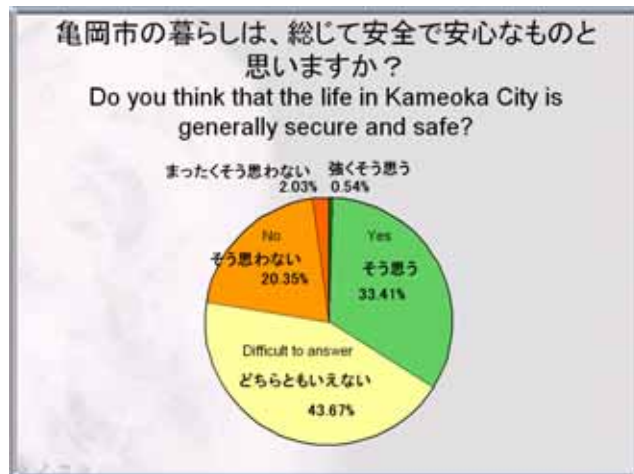
3 安心安全感と生活の質

次に、世帯での暮らしの中で、安心・安全感というものがどうなっているのか、個人の健康や外傷の経過を含めて、もう少し広い意味で、安全なコミュニティになっているかということについての評価をしていきたいと思えます。その指標は世帯表に含まれているのですが、世帯主の方にこのような質問にお答えいただきました。

「亀岡市の暮らしは総じて安全で安心なものと思えますか。」、そう思うという人が33.4%ですから、亀岡市の暮らしはどちらかといえば、安全な暮らしができていているといえるのではないかと思うのですが、そう思わないという方も2割いらっしゃいました。

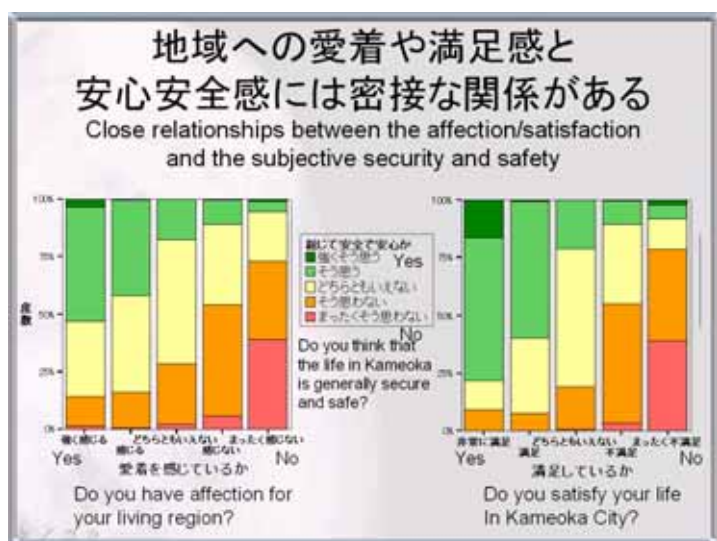
何が不安かという点については、今後家族が巻き込まれるかもしれないという不安について、いろんな項目について質問しましたが、やはり一番多いのは交通事故でした。交通問題に関しての不安が一番大きい、次が自然災害、火事、犯罪に巻き込まれること、学校でのケガ、とかそういうものです。

実際、交通事故が多いわけですし、交通事故に対する不安が大きいというの、主観的な面と客観的な面が対応しているケースじゃないかと思えます。自然災害については、みなさんが重大な被害を過去受けたわけではないですが、一回起こってしまったときの不安というのが大きく関わっていることも間違いありません。この安心・安全感と暮らしの質の評価というのはやはり大きな反比例にあります。



右図は「亀岡市の暮らしに愛着を感じていますか」という質問と、安心・安全感についての関係を見たものです。愛着を感じている、強く感じているという人は安全で安心だと思割合が50%、ですから、愛着を強く感じるという人は、非常に安心な場所に暮らしていると思っている。逆に全く感じないという人は、愛着をあまり感じない。

亀岡市の暮らしに満足していますかということについても、全く同じ傾向にあります。亀岡市の暮らしに満足している人は、安心・安全な暮らしを送っていて、不満という方は、ほとんど安全で安心だと思わないという関係がある。この暮らしの質を大きく決めている安心・安全感は、精神面に大きな影響を与えます。例えば、すぐ思いつく事例として、過去にケガや犯罪を受けてしまった人が、安心・安全感が大きく変わるのではないだろうかと思われています。



けが・犯罪の経験と安心安全感



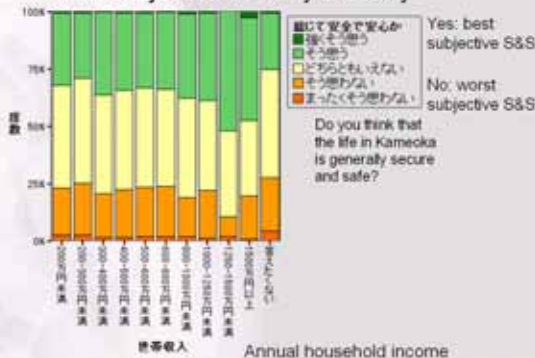
けがや犯罪の経験は安心安全感を当然ながら引き下げる
Experiences of injuries and crimes deteriorate subjective security and safety

左側はケガの経験がある場合と、ない場合で、安心で安全だと思いますか、ということを開きました。たしかにケガをした人のほうが安心・安全感が下がります。安心で安全かという質問に対して、全くそう思わないという人が若干増えていますが、その差はそんなに思ったほど大きくはありません。

もう一つの犯罪被害の方は、もう少し強く出ています。犯罪の被害を受けた人は、安心・安全な暮らしを送れるかといわれると、そうは思わないという人が当然増えてきます。

世帯所得と安心安全感

Relationship between annual household income and subjective security & safety



次に、世帯所得との関係を見ますと、あまり明確な差はでていません。1250万円を超える所得のある方は、若干、安心・安心だと思う人が増えますが、所得によって安心・安全感がすごく変わっているわけではなさそうです。

では、何が一番強く効いているのかといいますと、「地域でのつきあいの深さ」である、というのが1つの結論になります。

右図は地域でのつきあいと安心安全感の関係を示したものです。右側が「あいさつもなし」、左側は「生活面で協力関係がある」という場合で、右に行くほど地域での付き合いが薄い方々ですが、右に行くほど安心・安全だと思わないという割合が増えている傾向にあるということが分かります。

こういった点でも明らかに地域的な人間関係を豊かにするということが、安心で安全な雰囲気を作る上で大きな鍵になることが分かります。

なぜこうなるかという、1つは孤立しているほど自分は犯罪に遭いやすいという思いを持ちやすいということもあるでしょうし、犯罪にあって

地域でのつきあいと安心安全感

Relationship between neighbourhood social relationships and subjective security & safety



しまった後、立ち直る自信がないとかいろいろの要因が重なっているのではないかと思います、いずれにしても孤立するということは人間をどうしても弱くしてしまい、いろんな複雑な要因の大きなポイントであることは明らかであると思います。

そうしますと、安心・安全感を向上させるということは、亀岡での生活の満足度と、その向上と密接な関係があることは間違いのないこととなります。ですからセーフコミュニティを進めるということは、生活の満足度を大きく改善することと、基本的には同じだと思えます。そして、安

まとめ

- **安心安全感の向上は、亀岡市民の生活の満足度の向上と密接な関係がある。**
- Improvement of subjective security & safety should lead to improvement of general satisfaction of the life in Kameoka City.
- **安心安全感の向上には、けがや犯罪被害の経験ばかりでなく、地域とのつながりも重要。**
- In order to improve the subjective security & safety, neighbourhood social relationships among local residents as well as reducing injuries and crimes should be critical.

心・安全感の向上には、ケガや犯罪の被害の軽減だけではなく、地域とのつながり、人間を孤立させない、というの大きなポイントになっていることも見逃さないでいただきたい。

4 セーフコミュニティへの関心を決めるもの

3番目の分析でありますけれども、セーフコミュニティの関心について整理させていただきたいと思います。世帯表の最初に、セーフコミュニティの理念についての賛意をお聞きしました。「多くの事故・自殺・犯罪による死亡やケガは偶然の結果ではなくて予防できるもので、この考え方に賛成しますか」と訪ねたところ、非常に多くの方が賛成という回答をいただきました。3 / 4の方が基本的にはこの意見に賛成でした。

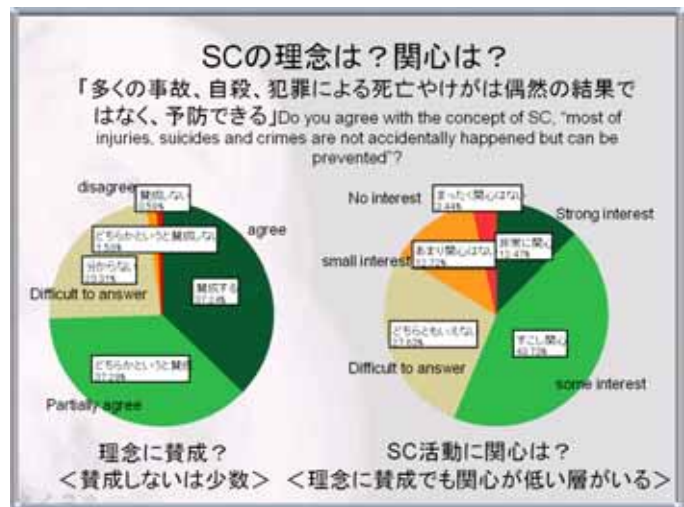
もう一つの質問は、「では、このセーフコミュニティ活動に関心がありますか」というもので非常にこれは漠然とした質問です。参加してくれますか、という質問じゃなくて、関心がありますかということですから、ある意味では一番敷居が低い質問ではないかと思うのですが、関心のある方は半数を超えていらっしゃいます。

非常に高い関心と、期待があるのだろうということは、この結果を見れば分かるのですが、左側に比べると関心があるという肯定的な意見の割合が減ることも見逃さない方がいいと思います。つまり、意味に賛成するということと、自分がセーフコミュニティに関わってほしいという意志を持つかというのは、おそらく別のことだということが読みとれると思います。

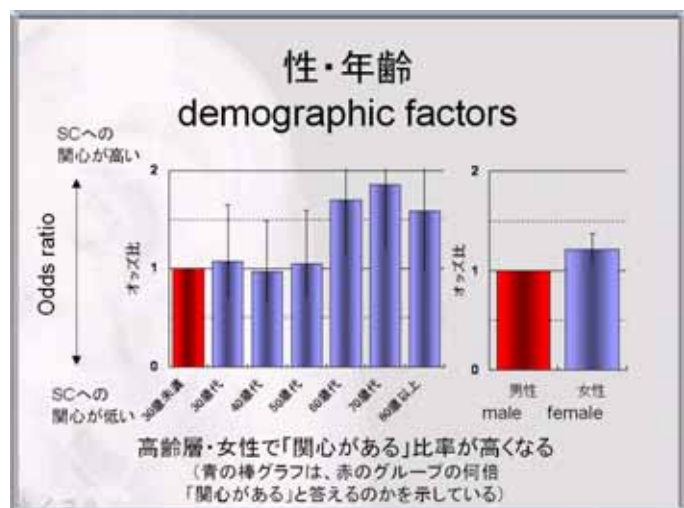
では何がこのセーフコミュニティ活動に関心を「持つ」「持たない」を決めているのでしょうか、いろいろな要因について調べてみました。これは年齢階級別、それから性別、性別は世帯主もしくは、世帯票を回答してくれた方の性別ですが、基準となる集団に対して、他の集団が何倍関心を持っているかということを示しています。

ですから、この年齢については、30歳未満の方を基準にしまして、70歳代の方は1.8倍ぐらい関心があるということになります。このグループのグラフが上方に長いほど関心が高いということになります。

やはり、60を境にして、関心を持つという人が非常に増えてきます。特に、定年を迎えまして、今の仕事に代わることの活動に対するモチベーションを持っていただけるということもあるのではないかと思います。女性の方が若干男性よりも関心をもたれる方の割合が高いですけれども、あまり大きな差はありません。



何がSC活動への関心を決めているのか？
 What are major determinants of residents' interest in SC?
 Logistic regression による分析



また、世帯所得でありますけれども、所得が低いと参加できない、おそらく生活に余裕がないということの意味しているのではないかと思います。

ふたたび、地域との付き合いが深く関係しております、あいさつ生まれというグループを基準にしますと、あいさつを交わすとか、世間話をするとか、生活面で協力関係があるとか、地域的な付き合いが深くなるほど明らかにセーフコミュニティ活動に対する関心は高くなる。

こういった層が、今これから取り組もうとすることに就いてすぐに協力して下さる方々を多く排出するということになるわけです。

でも一番強く効いているのは何かと申しますと、地域への愛着があるかどうか、強く感じる人が、全く感じない人の8倍から9倍ほどセーフコミュニティ活動に関心を持っています。この地域のあり方というのは、安心・安全感と非常に密接な関係にあります。ですから、地域のあり方の代わりに安心・安全感について調べてみると、「安心で安全な暮らしが亀岡でおくれますか」という質問に対して、「全くそう思わない人」に対して、「安心・安全な暮らしがおくれると思う人」は6倍以上。明らかに強くセーフコミュニティ活動に反応しています。

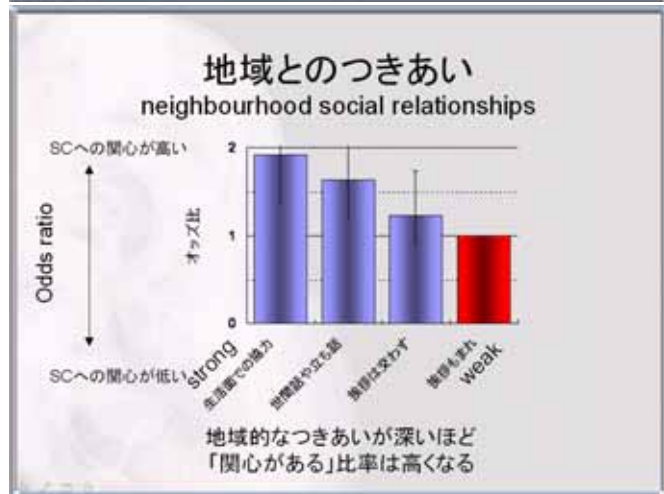
これは、少々興味深いというか、問題点を含んでいます。というのは、自分が今安心で安全な暮らしを送っている方々が、セーフコミュニティ活動に主に関心を持っている。今自分は安心で・安全な暮らしを送れてないと思う人はセーフコミュニティ活動に関して、参加に対する関心がないということの意味しています。

どうしてだろうと、1つは、信頼がないとい

うことなのかもしれません。自分たちが参加しても何か達成されるということがないのではないかと。所詮自分たちが何かやったところで、どうしようもないだろうと信頼に対する問題があります。

もう一つは、生活に余裕がない中では活動に参加する余裕がないから参加できないという気持ちがあるのかもしれません。

整理いたしますと、セーフコミュニティに対



まとめ

- セーフコミュニティへの関心・期待は大きい、「理念に賛同すること」と「関心をもって参加していくこと」には、少しずれがある。
 - There are some gaps between approval of the SC concept and interests in SC activities.
- 安全で安心な生活が営めない人ほど、SC活動に関心をもたない／自主的には参加できない。
 - Like Inverse care law, those who are most vulnerable to various risks have least interests in the safe community activity.

する関心について、期待については大きいわけですがけれども、意味に賛成することと、関心を持って参加していくことにはズレがある。そして、安心して安全な生活が営めていない人ほど、セーフコミュニティ活動に関心を持たない、若しくは自主的には参加できない、というような状況にあるということが言えるのではないのでしょうか。



くるということが、これからのセーフコミュニティ活動の忘れてはならない点ではないかという考えを持っております。

そして、それをさらに進めるためには、最後に、セーフコミュニティ活動への期待をさらに高めるような事例を、モデル的なケースをつくっていくことによって、信頼がないと答えた人に対しては、信頼をつくっていくということが大事ではないかと思っています。

以上で私の発表を終わらせていただきます。どうもありがとうございました。

5 おわりに

では、最後に何が言えるのだろうか。これが結論でありますけれども、1つは、いろいろな社会的な結びつきと、健康やけがの状況、安心・安全感すべて密接なつながりがあります。

人の関係に豊かさを持たすということは、安心・安全な社会をつくっていく非常に大きな基礎になっていくことは間違いないと思います。

最近ソーシャルキャピタル論(社会関係資本)人間の関係において、豊かさを考えるということが、地域の重要な資本となっていて、その地域をより良くする大きな基礎的な資源になっているということがよく言われます。これは、明らかにこれから推進していくべき大きな1つの方法だということは間違いないと思います。

しかしながら、個々人がその取り組みに対して関心があるから、その人が利益を享受できるというのは、セーフコミュニティの活動理念では必ずしもありえない。個々人の意識や取り組みだけに任せるのではなくて、人間関係の豊かさも含めて、安全な環境をつくっていき、関心がない人にも利益が享受できるような環境をつ

-2 セーフコミュニティ 篠町自治会の活動

井内 邦典 亀岡市篠町自治会長



みなさんこんにちは。これから篠町のセーフコミュニティについての取組をご説明申し上げます。篠町でもまだこれからセーフコミュニティに取り組んでいき、こういうことをするのだという形では明確には伝えておりません。これからのことです。これからご説明申し上げますことは、ほとんどの方がもうすでに取り組んできているであろうことがたくさんあります。



篠町というのは、亀岡の東の玄関口にありまして、亀岡市の縮図です。亀岡市にあるものはすべてあります。いいサンプル地帯だと思います。人口は1万8千人、所帯数は6,200所帯ありまして、それを36の地区で構成します。自治会館が1つと、36の地区単位の公民館というのがありますし、学校は2つの中学校、3つの小学校、幼稚園が1つ、保育園が3つ、消防署、文化センター、図書館、市民病院を始め、医療機関がたくさんあります。



各科のお医者さんもたくさん住んでおられます。デイサービス等の福祉の施設も整っております。集落は駅前の高層住宅から始まりまして、高層住宅、住宅地、そして旧集落が混在しておりますし、京阪神へのベッドタウンとして人口がなお増え続けているところであります。この老ノ坂で、国道で京都につながり、JRで馬堀駅から京都につながるというところでございます。



篠町では活発にまちづくり活動ということを行っております。にぎわいのある町、このにぎわいというのをテーマにしまして、人がお互いに挨拶をする、また立ち話ができる、さらにもっと深い絆ができる。こういった人の絆ができあがっているのが、にぎやかな社会であり、こういったことは、自分たちでやろうと思えば自分たちでできることです。

篠町では、これを自分たちでやろうということで活動していきまして、今年で4年目になります。毎年このようなアクションプランということで、どういうことを具体的にやるのか決めて進めまして、現在は2007年度、4年度のプログラムを実行しているところであります。

具体的には1番から、めがね橋を中心に案内板を立てたり、篠町宣言といってゴミのポイ捨てや犬の糞をなくす町にしようと呼びかけをしたり、このようなエリアを増やそうとしています。

2番目はどんなことかといいますと、馬堀駅前七夕であるとか、千灯会であるとか、門松といったものを飾り、人のふれあいの場所をつくる大きなイベントをやるということ。

3番目は安心・安全のまちづくり、今年はセーフコミュニティで、日本で最初の認証をとるための手助けをしようということも含んでいます、実は昨年から取り入れていまして、篠町のふれあいマップだとか、安心・安全で暮らすための自主防災訓練とか、いろんなことをやっております。

4番目は、こういう様々なまちづくりを実施するには、区長を始め各種団体の役員が必要となりますが、現役で仕事をしておられる人は簡単には集まらない。ボランティアには時間が余っていて、多様性のある人材が必要なわけですから、別の形でまちづくりのために、たとえば長尾山に市民参画で散歩道をつくりますよ、農園を耕しますよ、めがね橋を掃除しましょう、といるいな切り口で絶えず人を集めています。集まってきてもらった人は、そこで活動して交流を深めてもらう、そして今度はまちづくり活動をしてもらうという仕掛けを作っています。

5番目はコミュニケーションの強化と、町民の交流の拡大、特にたくさんの人達が住んでいますので、私たちは双方向のコミュニケーションを行うようにしています。自治会便り、ホームページ、区長便りなどいろいろな形で発信して、自治会館でしたら、毎日9時から3時まで暇だったら来てくださいといった形の運動をしています。

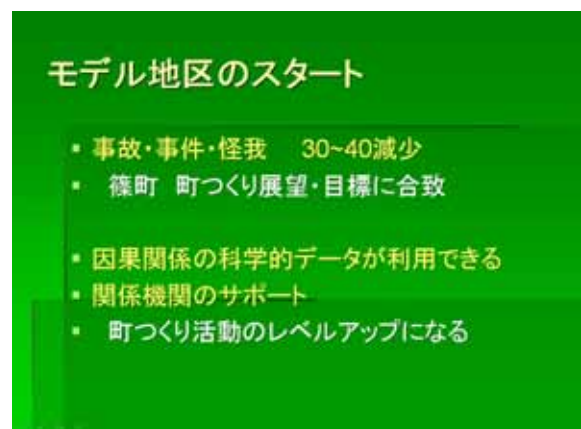
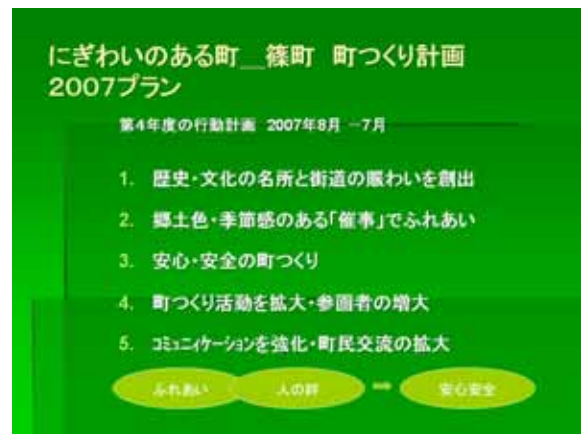
6番目は親子の交流、親子揃って来てくださいというイベント、凧作り教室や凧揚げ大会、星空観察というようなことをやっております。いずれも人々のふれあいをつくろう、人と人との絆、関係をつくろう、こういったふれあいと人の絆があることが、安心・安全に繋がるのだということが、私たちのまちづくりのテーマです。

私たちは自分たちでも良くやっているな、順調にしているなと評価しているのですが、外部からも高く評価されていまして、大変光栄だと思っております。

今年の2月には自主防災会が知事表彰を受けまして、3月は亀岡市から熟年パワー発揮団体ということで第1号の認定を頂きました。8月には、めがね橋の環境整備で国土交通省と道路協会の2つの団体から表彰されるなど、外部からも高く評価されたということは幸いなことであります。

それでは、セーフコミュニティについてですが、セーフコミュニティは、昨年11月に、市役所のこんな話から始まりました。

「セーフコミュニティのモデル地区になってくれませんか」ろ話がありまして、私はいろんなことを頼まれるので、今度は何をやるのですかと聞いたら、「篠町はまちづくりを一生懸命やってるから基盤整備が足りない、社会の基礎、活動の組織、そういったものができているから、何もしなくてもいいくらいですよ。亀岡市はこれからWHOの日本1号の認証を受けるためにチャレンジするので協力してください。」と言われた



ので、セーフコミュニティってなんですかと聞いたら、簡単な説明があったのです。そのとき、確かにこれは素晴らしいことだと、絶対に地域あげてやらなくてはいけないと思いました。

すぐ帰って、区長会を開きまして、みんなと相談しました。そしたら、みんなでやろうということになりまして、何をするかなどについて話し合いました。

1つは、取り組んだ結果、事故や事件やケガは30%~40%減るということは過去に提唱されている、これは私たちが言いました、まちづくりの安心・安全を高めるといった目標と全く合致します。これは素晴らしいことです。

2つめは、因果関係といったものを科学的データ、関係機関でもサポートします。これは大変素晴らしいことだと思います。私たちはまちづくりをするのに、町の住民だけが集まってやるのではなく、専門なところとか、専門なノウハウを持ち込んで、一緒に仕事ができるというのはこれからのまちづくり活動のレベルアップにも繋がる、ということで私たちはこれを絶対やろうと決めました。今もこれは効果があると確信して動いているところです。



その後、セーフコミュニティとして最初に取り組んだことは、地域で現況を知ることです。まず、説明会を開催し、4回のワークショップを行いました。その中で熱心に討議しました。地域の現状を知るといって我々が経験的・感覚的に知っている問題というのはだいたい5つ6つありました。子どもの安全、高齢者の安全、交通の安全の問題、犯罪に対する安全、災害に対する安全、こういった問題が的を射て出てきました。

ワークショップから出てきたこういった事実、京都市、亀岡市、保健所などの力を借り、公的機関のデータを照らし合わせて、私たちもいくつかの分科会だとか推進会、いろんな形でこの取組をいたしまして、現在は篠町でセーフコミュニティのアクションプランという形で、5つの項目で発表しようというふうに考えています。



その1つめは、向こう三軒両隣の篠町のふれあいマップ、みなさんご存じのように、向こう三軒両隣という素晴らしい良好な関係があったのです。今、それが薄れているところに、いろんな問題がある。

そこで、このいい制度をもう一度復活させようということで、何をするかといったら、20所帯ほどからできている隣組の人が集まって、白い大きな紙に手書きで、家の名前を書くのです。そしてその当主の名前を書く。ここに書いてあるのは、1つは昼間の家族数、こちらは夜間の家族数、印は災害時の要支援者、は高齢者といった形で、自分の町の中にはどういう人がいるのかを記す。2つめは、災害時の一時避難場所と大きな災害が起こって、亀岡市に災害対策本部が設置されてそのときに開かれる避難所です。これを家族が誰でも知っているということは、外で働いている人はたくさんいますから、帰って来て連絡がつかないときの情報センターにも



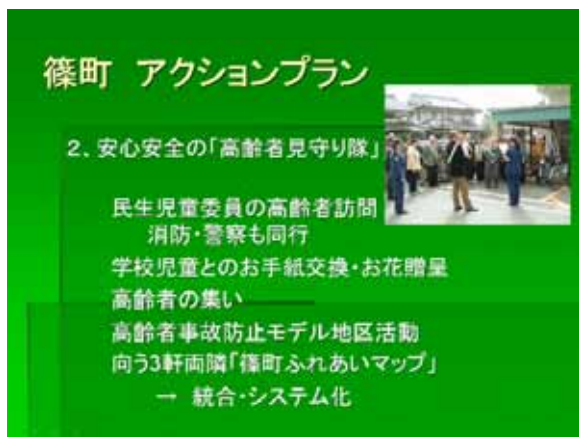
なるわけです。

このマップは、このような形で、隣近所で集まってつくるわけです。そして活用は、高齢者の見守りにもなりますし、災害の要支援者というだけではなく、健康な人も、様々なことの見守りという形で大変役に立つと思います。こういうものをつくって問題になるのは、保管はどうするのかということです。これは隣組の人間が知っていればいいことですから、隣組の人間の頭に入れたら破って捨ててもいいのです。

篠町では何も、区長に提出しろとか、自治会長に提出しろとか言っていません。「各隣組でつくってください。」、「区長、あなたのところでは作りましたか。」そのイエス・ノーだけでどこまで浸透しているかを量ろうという方式でやっております。

かたや、亀岡市ではふれあいのネットワーク制度に取り組んでいます。私たちはこれらが補完しあっていくことが、一番うまく動いていく方向だと考えています。

このふれあいマップはセーフコミュニティになって始めたものではありません。この亀岡市のふれあいネットワーク制度がスタートした時点でスタートしました。しかしまだ、浸透率がそんなに高くありません。セーフコミュニティを機会にこれを全町に拡大していこうというのがアクションプランの1つめでございます。



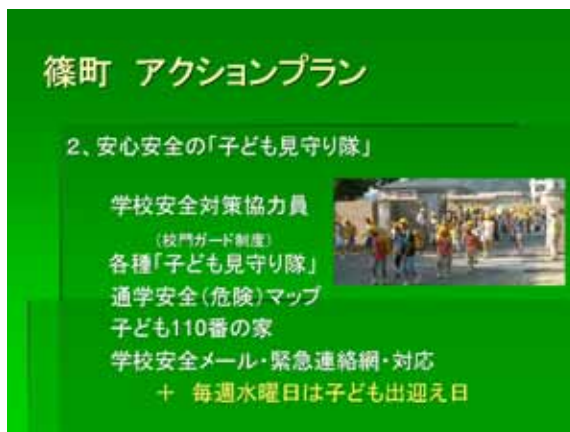
2つめは各種の安心・安全の見守り隊というものを考えています。1つは高齢者見守り隊ですが、現在篠町においては、一人暮らしの高齢者が、二百数十名おられます。民生、児童委員は担当を決めまして、それらの人たちを少なくとも2ヶ月に1回はカバーしています。実際訪問する場合、電話で安否を確認する、そしてまた、自分たちだけではなく、消防と一緒に廻ります。これは防火の観点から、警察は防犯との観点から、民生・児童委員さんと同行して廻るということをしています。

学校の児童が、手紙や花をつくってこれを高齢者に届けるということもしています。また、高齢者の集いということで、高齢者の方に集まってもらって、食事会をして、コミュニケーションをもってもらおうということや、1年前から篠町は警察署の高齢者事故防止モデル地区に指定されまして、高齢者の事故をなくすための取組を進めています。

そのときのキャンペーンの1つなのですが、高齢者は自分たちの勉強する場だけじゃなしに、自分たちが学んだことを、他の高齢者にも広め、活動に参加するように働きかけていこうとしています。そして、先ほどいいました「向こう三軒両隣」ふれあいマップ、こういったことを総合しながら高齢者を見守るということをしていきたいと思っています。

安心・安全の2つめは子ども見守り隊です。亀岡市は全町内にわたって学校のガードマン制があると聞いております。そして、その他にも子ども見守り隊、これは各地各様のものがあります。篠町にもいろいろな子ども見守り隊があります。

学校は危険箇所の把握、通学の安全、不審者情報に対して、マップもつくっていますし、子ども110番



の家も完備されています。学校安全メールという情報に基づく緊急連絡網、あるいは対応ということも現在取りかかっています。



る道のそばで、その時間は作業をしてくださいと、できるだけ水曜日は子どもを全員で迎えるのです。

次は、安心・安全の防犯パトロールです。これは防犯推進委員が非常に熱心でして、篠町の地区内を自治会の車をパトカーにしまして、ブルーの回転灯をつけて、毎週土曜日、8時から全町をくまなく廻り、防犯を訴えています。かたや、他のみなさんは、保育園や学校やいろんなところへ行って、防犯の知識を普及する防犯劇も演じておられます。

3番目には、南丹元気づくり体操というのがありますが、これは京都府南丹保健所が高齢者の転倒予防のために開発した運動です。篠町には14名のインストラクターがいらっしゃって、いくつかのグループが活動されていますが、活動しているところが非常に限定されています。何が問題なのだろうと、いろんな話をしてみたら、なかなか人を集めるのが難しい。じゃ、自治会や区長がそういう機会をできるだけつくりましょう、これは1つの解決策ですね。

2番目は、講習会場。これは自治会館については無料で貸しますよと。最近、公民館・集会所等も洋間が多くて、このうえではなかなかできにくいというので、マットを準備しまして、音楽やビデオがあったらやりやすいというので、ビデオも買って、もっと南丹元気づくり体操を広めて、転倒といったことを防



こういったことも踏まえた上で、篠町やつつじヶ丘の多くの地域では、この10月から、毎週水曜日は子ども出迎え日ということを始めようとしています。これは何かといいますと、水曜日の子どもの帰ってくる時間に、家の前の掃除をしたり、お花に水をやったりしよう。

買い物に行くときは、子どもの帰ってくる前か後に行ってくださいと、お店の前でついでに、子ども見守り隊に参加してくださいと、犬と一緒に散歩する人、1人で散歩する人、そういう人もこの時間に散歩してくださいと、農業をされている方は子どもの帰って



止していこうと。

さらに、私たちは運動会とか各種のスポーツ大会をやっています。十分な準備体操をして取り組んでいるのですが、今後は、南丹元気づくり体操をこういったところのストレッチ運動にも取り入れたいと。そして学校の運動会などのときにも取り入れていったらいいのではないかと考えています。

4つ目は今までやってきたまちづくりのいろんな活

動、こういったものをどんどんやって、人と人の基盤をつくって楽しみながら、人が互いに交流をしていくことを推進しながら、セーフコミュニティをつくる大きな原動力としていこうと考えています。

5つ目にはですね、このプロジェクトというものは、社会が取り組み方を変える。そのためには我々が考え方だとかを良く理解しなくてはいけないわけです。そういった意味で私たちは、セーフコミュニティの概念をやっていることをみんなに良く知ってもらって、よく分かってほしい。そして、社会全体で安全に対する意識を変えようということを考えています。

こういった普及活動というのを5番目の柱としまして、亀岡市全体にも京都府にも、日本中、世界中のネットに繋がるわけですから、そういうところへの情報発信ができていけたらいいなと考えています。

実際には、来月からセーフコミュニティ通信というのを、発行していきたいと思っておりますし、篠町自治会のホームページにセーフコミュニティのコラムをもう少し増やして、もっとコミュニケーションにつとめ、これを周知していきたいと考えています。



以上が篠町のセーフコミュニティの取り組みだと、発表しようとしていることです。安全というのがみんなの願いでありますけれども、なかなかセーフコミュニティの認証取得を達成するにしても、1つのアイデア、また他のアイデアがたくさんあります。こういったアイデアをバラバラにやるのではなく、まとめてシステム的にして取り組んでいくということが、成功のキーではないかと思っておりますし、またこういった新しいことをおこなうにはリーダーシップ、引っ張っていくエネルギーというのが大変必要だと思っております。

そういった意味では、各組織のリーダーにそれぞれ活躍いただきまして、セーフコミュニティについてみんなで考えていただきたいと思っております。そういった意味で、ここにがんばれと書いてあるのは、自分たちに対して、また周りに対して頑張ろうといいながらこれを実現していこうということでございます。

ご静聴ありがとうございました。



質疑応答

1 セーフコミュニティの再認証について

本日は貴重なお話を頂きまして、ありがとうございます。パク先生のお話の中で、スウォン市で再認証されるというお話があったかと思うのですが、再認証というのは認証後、絶対に出てくるプロセスなのか、なぜ再認証ということをされるのかということを知りたい。

回答：チョ・ジュンピル教授

セーフコミュニティの認証をしてしまうと、そのコミュニティは盛り上がりがどんどん下がってくる傾向があります。運動して取得するまでの勢いがなくなってしまう。コミュニティによっては、ずいぶん取組が低下してしまう。そういうコミュニティに5年という期間を経て、取組を引き続き継続していただくために、盛り上がりが低下してきたコミュニティにもう一度やる気になっていただくために、再認証というシステムを作っております。再認証は私が代表を務める認証センターが担当しまして、認証と同じようなプロセスを経て、もう一度認証するということをいたします。



2 活動に対するプロセス評価結果について

さきほどのパク教授のお話の中で、セーフコミュニティの活動のプロセス、満足かそして不満足か、安全に対するの評価という話をされていたと思うのですが、確かに最後に安心と安全が増えているのですが、逆に不満・不安というのも倍ぐらいいんcreasingしているのではないかとと思うのですが、その辺の理由で分かっていることがあれば伺いたいののですが。

回答：パク・ナムス准教授

今のご質問についてですが、グラフでは一番右の方が「満足」で、その次が真ん中で、左側が「満足でない」ということになっており、そのグラフの「満足でない」のところ、不満や不安が増えているのではないかとのご指摘だと思うのですが、これを答えた方というのは、行政関係者がほとんどで、なぜこれを答えたかという、指標でどう感じたかというのを、行政の方が自分たちで取組をした後に、自分たちの最初に掲げた目標に達成できなかったと感じた人が、ここに加わったために、達成したと感じなかった人が増えているという背景があることをご理解ください。

3 食の安心・安全について

セーフコミュニティには食品に対する安心・安全というのはないのでしょうか。

チョ・ジュンピル教授

もともとの取組の対象というのが、それぞれ自分たちのコミュニティで何が問題なのか、安全に対する課題なのか、ということから始まったことですので、最初は食の安全というものはありませんでした。しかし、この取組が何十年と続いてくる間に、特に最近アジアでの取組が活発になる中で、中国のほとんどのコミュニティで食の安全というのが、プログラムの中に含まれるようになってきました。このような状況をふまえて、近いうちにフードセーフティという形で、指標をつくりたいと思っています。

中毒など毒に対する安全というのは元々ありましたので、もちろんそれに関連して食に関する安全というのは必要だと思います。その問題が出てきたのが特に昨年からということなので、こちらからという問題になります。逆に今ここでこういう声が挙がったということは、亀岡市から始まるということも考えられると思います。

4 病院の取組について

病院としてはこういった取組をされているのかお聞かせください。

亀岡市山内企画課長

亀岡市は、市立病院を持っていて、その他救急外来の病院、個人開院の医療機関などがあるのですが、今年から新たに外傷サーベイランスの取組を始めました。セーフコミュニティに取り組んだ中で、死亡者というのは人口動態から統計上把握できるのですが、実際にどれだけの方がケガされているのかというデータは全くございませんでした。

警察署では警察案件に関わったデータのみですし、消防救急隊は救急搬送したデータのみ、市民がどれだけケガをしているの、どれだけ事故に遭っているのかというのは全く分かりませんでした。一番分かるのはどこかといったときに、やはり医療機関かなということで、ケガで医療機関に行かれた際に、初診の際に、もう一枚カルテをとっていただいで、データをためていこう。いつ、どこで、何が原因で、こういったケガをしたのかというのを調べていこうということになっています。

今、市内の30ほどの医療機関で、データを取りだしています。この4月から始めまして、3ヶ月の集計をしました。多くの方が実際にケガをされている事実が分かってきましたし、家庭内での事故というのが最も多いということが分かりました。



ケガというのは外でというふうに考えがちなのですが、実際には家庭の中で、生活の中でケガをされているという方が一番多いです。しかも、転倒というのが一番多いというのが分かりました。

もう少しデータをためて、分析して、対策として何ができるのかを考えていきたいと思います。

そういった面で、医療機関では医師会を中心にケガ防止ということでデータを集めていこうということで協力を頂いています。もちろん、医師会、病院の院長というのは、セーフコミュニティのメンバー

として一緒に研究チームを作っていて、検討委員会のメンバーです。以上です。

5 セーフコミュニティアンケート調査について

アンケート調査において、何が安全を脅かしているかということで、交通事故が一番と出ていたのですが、自殺に関しては安心・安全を脅かすものとして問いの中で聞いていないのでしょうか。

中谷友樹教授

自殺は聞いていなかったと思います。今回の調査の中には自殺に関してのリスク評価というのは入っていない。こういったセーフコミュニティ活動に参加してみたいですかという質問に関しては、自殺予防というプログラムについて選択肢があるわけですが、私のお見せしたスライド自体は、今後何年かの中に、世帯の誰かが次のような事故に遭う可能性はあると思いますが、という質問に関しては自殺という項目は入っていないと思います。

レイフ・スヴァンストローム教授

中谷教授の発表の中で25%の方がこのアンケートに回答したということなのですが、この結果というのも、取組が進むにつれてより関心が高まるだろうということです。やっぱり鍵となるのはいかに安心・安全を感じるかということと、意識が高まるのかということで、これは、どのくらいこの取組に関わるのかに相関します。関わりというのは、非常に大きなキーポイントで、取組の高まりが安全に関する高まりだろうし、安全に対する実感も高まるだろう、ということでこれからも引き続きこのような調査を続けてください。

中谷教授の発表の中で明らかになったのは、スポーツと職場での安全というのが大きな要素であるということです。これは、亀岡市の取組では比較的弱いと思われるポイントです。ですからぜひ取り組んでいただきたい。そのためには、中年層の方、仕事をされている方、あるいはもっと若い方たち、そういう方が主になって自分たちで問題を見つけて、話し合っ て取り組むことが大切になると思います。このような調査をされたことは、とても素晴らしいことだと思います。



中谷友樹准教授

回答率に関して、25%しか回答されていないという見方もあるのですが、郵送調査としては、非常に高い数値であります。統計学的に見れば4世帯中1世帯しか返してないわけですから、結果にゆがみが入っている可能性は捨てきれないというのは、間違いのないと思います。この点について学問的には、年齢とか構成を細かく見て、その部分を調整しながら慎重に分析するということは、ある程度は可能です。そのような調整はしていますが、今のところそんなに大きな結果の違いというものが出ていません。

このような、マイナスの面はありますけれど、外傷サーベイランスと比べても重要な点もあると思っています。というのは、どこでケガをするのかというのは、いろんなケースがあるのですけれども、外傷サーベイランスというのは、亀岡市内の病院でしかできないのですね。亀岡市はベットタウン的な側面が強くありまして、働いている方は、京都市とか大阪とかに出られてケガをされているという傾向が結構あると思います。外傷サーベイランスで出た結果と、アンケートによって、ここに住んでいる方がどこでケガをしたかというのは、違う情報をもたらす可能性があるんで、相互に補いながら外傷サーベイランスと社会調査的なもので、比較しながら分析していけるといいなと考えています。

ですから今後も、何年かたってからベースラインの評価をもう一度検証する意味で実態調査をして比較してみたいと考えています。

6 医療機関の協力について

大分県の中津市でも外傷サーベイランスに取り組んでいるのですが、亀岡市関係の方にお聞きしたいのですが、医療機関の協力数が36カ所と、非常にたくさんの医療機関に協力いただいているようです。おそらくボランティア的な協力だと思うのですが、いかにして協力体制をいただいたのかということ、それから、回収に関して、これだけ多いと大変だと思うのですが、どの機関がどのように行っているか、集計はどこがやっているのかお聞きしたいと思います。

先日、亀岡市さんに私どもの外傷サーベイランスを視察いただいたところですが、参考までに先行事例を1つ情報としてお伝えしたいと思うのですが、調査票の病名に脳挫傷というのがありますが、この脳挫傷というのを勘違いしてくる医療機関がかなり多い。頭部の擦過傷と思われるものを、脳挫傷をしてくる医療機関が多いようなので、1つ情報として提供しておきたいと思います。

山内亀岡市企画課長

短期でこういうことに取り組んだわけですが、その陰では保健所の力が大変大きかったと思っています。保健所にリーダーになっていただいて、各医療機関個別に依頼頂きました。もちろん医師会を通じてでもですし、それ以外にも保健所長自ら医療機関に出向いて、セーフコミュニティの理念を説いて、1つ1つ理解を頂いたということが大きな力になったと思っています。それと、今やっているのは救急告知の医療機関・病院と外科、整形、小児科、整形外科、眼科、耳鼻咽喉科、そしてつい先日から歯科にもご協力いただくようになりました。

回収ですけれども、保健所と市の保健センターの職員で月2回、回収をしていただいています。回収しましたデータは、すべて保健所に集約しまして、保健所でデータ分析を頂いて、個人情報保護の関係もありますので、分析された結果を研究会にデータとして提出いただいて、そこでその対策を検討する、というシステムになっております。



以上 2007年9月23日 亀岡セーフコミュニティシンポジウム



問い合わせ先

京都府安心・安全まちづくり推進室 TEL075-414-5079

HPアドレス <http://www.pref.kyoto.jp/safecom/>